

Title	随想
Author(s)	石神, 襄次
Citation	泌尿器科紀要 (1974), 20(2)
Issue Date	1974-02
URL	http://hdl.handle.net/2433/121628
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

随 想

石 神 襄 次*

幕末、世情騒然たるころ、数年つづきの飢饉に物価は高騰し、買いだめ、売りおしみにたまりかねて、打ちこわし、一揆が続発した。当時、江戸町奉行所の門前に、「御政道、売り切れ申し候」なる落書きがはりつけられたという。庶民の苦しみになんの手も打ちえずにいる幕政を痛烈に批判したもので、現代に通じるものが感ぜられる。

ところで、われわれの領域においても、基礎、臨床のいずれをとわず、同様の事柄が少なからず認められる。いわゆる難病と指定された諸疾患はいわずもがな、泌尿器科疾患でも、各種悪性腫瘍の末期、背髄膀胱、難治性特発性腎出血などなど、少なくとも現在の医学的知識では「治療法、売り切れ申し候」とはり紙をつけざるをえない症例に毎日のように直面しているわれわれである。

先日も、数年に及ぶ特発性腎出血の患者が入院した。主治医はあらゆる臨床検査法を駆使して模索したが、なんら手がかりをつかみえない。また、いろいろの治療を施したが症状は不変のままである。そこで退院させるといふ。「何をいうか」と一喝した。正直のところ、筆者として主治医のおこなった以外になにかよりよき方策があつてのゴトバではない。ただ、現在認められている方法ではだめであるから give up するという安易な気持ちを腹立たしく思ったからである。しかし、この症例のように、現在なお活動性の変化が進行していると想像できるばあいは、まだ病因究明への希望がたもたれているもので、新しい検査法の開発に意欲を燃やす人びとも少なくない。しかし、現症が過去における病的変化の後遺症であり、かつそれがすでに不可逆の変化にまでおよんでいるときには上記主治医ならずとも give up といいたくなるのが医者としての本音であろう。われわれの手がけている男性不妊な

どはまさにその大部分がこの範疇に属するものである。各種のアミノ酸や代謝促進物質、さらには内分泌物質の投与によってさえ、精液所見を授精可能の状態に導きうるものは20%以下にすぎない。とくに無精子症で、睾丸生検によっても性細胞欠如を認めた患者に、子宝をうる望みのまったくないことを伝える気持は、死刑を宣告する裁判官にも似て心苦しい。

しかし政治はともあれ、われわれの世界で「売り切れ申し候」では許されない。このような不幸の症例を1人でも少なくしようと思う願ひは、必然的にならんかの予防対策はなきやという疑問につながる。しかし患者の病歴をくわしく調べても現在の睾丸組織像とあきらかに因果関係をもつと思われるエピソードはなかなかつかむことができない。流行性耳下腺炎罹患者にこのような症例の多いこと、またかならずしも睾丸炎合併例に限っていないことも事実であるが、これとて、罹患の時点ではっきりと変性の原因が与えられたことを証明することは不可能にちかい。

元来、病理組織なる代物は古戦場を眺めるようなものだと筆者の持論であるが、性細胞欠如の睾丸組織像からなん年か前の激戦の様相を偲ぶことは容易ではない。しかし全然世界をかえて、考古学の面をみると、最近の遺跡の発掘、遺構の再現などに驚くべき進歩がみられる。考古学者はわれわれがみてはなんの変哲もない畑の下から偉大な宮跡を発見し、さらにそこに埋まった土砂の詳細な分析までおこなって当時の再現に努力している。病理組織と古跡、まったく次元の異なる2つの世界でも、過去の状態を再現させる努力は同じでなければならない。

「売り切れ申さず候、売り切れ申さず候」とつぶやきつつ、睾丸の組織標本をみつめる昨今である。

吾子をえぬ宿命をおいし 夫婦あわれ
寄り添うがこと部屋を去りゆく

* 神戸大学医学部教授（泌尿器科学）